

R.Magritte, P.Piccaso, F.Pomponが導く造形プログラム の試み

| | |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 著者 | 小田 久美子 |
| 雑誌名 | ノートルダム清心女子大学紀要．人間生活学・児童学・食品栄養学編 |
| 巻 | 42 |
| 号 | 1 |
| ページ | 20-29 |
| 発行年 | 2018 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1560/00000388/ |

R.Magritte, P.Picasso, F.Pompon が導く 造形プログラムの試み

小田 久美子[※]

The Art Programme Using the Works of R.Magritte, P.Picasso and F.Pompon

Kumiko ODA

In the latest primary school curriculum, 'expression' and 'appreciation' have been newly established as components even in the early school years. The aim of the current study is the creation of a detailed art programme that blends expressive and appreciation activities in a reasonable way by the use of contour lines in children's preschool art education. The study not only develops ways to directly stimulate vision by using 'drawing paper containing contour lines (contour drawing paper)' but also explores possibilities to encourage without pressure representation activities where children who are reluctant to draw and those who are not reluctant can participate together. The study is aimed at searching for an art education method for preschool children that considers the connection with the new curriculum as well as inspiring the children to be aware of the link between artworks and their own activities. This will be achieved by building on the development of a play in which the works of Magritte, Picasso and Pompon are introduced and by preparing the opportunity for the children to experience the arts before they engage in doing the activity.

Key words : Outline, Preschool art education, René François Ghislain Magritte

問題

就学を控えた年齢になると、保育者が願うように絵を描き表現することを楽しさを見いだすことが出来ず、絵画表現に対して苦手意識を持ち始めたり、描き始めることに躊躇したりする子どもが増加する。幼稚園のクラス内にそのような子どもが混在している中で、全ての子ども達の創造性を育

むことを目指して、保育者が消極的な子どもに対する別メニューを用意し、一斉活動を同時進行させることは難しいと言える。本研究の目的は、描画に積極的な子どもとそうでない子どもが同時に楽しい活動を行う事が出来る就学前美術教育における造形プログラムの実施と、その効果を検討することである。

本論では、輪郭線を用いることで表現活

キーワード：輪郭線、就学前美術教育、ルネマグリット

※ 人間生活学部児童学科

動と鑑賞活動が無理なく融合した遊びの有効性を確認するため、3人の作家による芸術作品を取り入れた活動の検証を行っている。

研究のこれまでの流れの概要を述べた後、第1段階では、造形活動にタイアップさせるため選出した芸術作品である、R. Magritte, 《不思議な国のアリス Alice au paysmerveillees》・1946年¹, P. Picasso, 《泣く女 Weeping Woman》・1973年², F. Pompon, 《白クマ L'Ours blanc》・1927年³ に関して紹介する。第2段階では、幼稚園年長組の5～6歳児において、6つの活動から構成されている造形プログラムを実施し、結果を分析・考察する。

研究の背景と経過

これまでに筆者は、以下のような研究を重ねてきた。発展させた研究経過の概要を簡単に述べる。

問題の所在として、幼稚園の年長になると絵画活動に消極的になる子どもがいることを教育現場への調査で明らかにし、描くことへの不安から引き起こされる絵画表現への躓きを乗り越えるために必要な、保育者の適切な援助の開発という喫緊の課題存在を明確化した⁴。そして子どもの生活に実際に浸透して親しみのある塗り絵遊びに着目して、絵本を導入として輪郭線を用いた造形遊びと子どもの絵画表現との関連性を考察した⁵。さらに、2～6歳の幼児の絵画表現の変化に迫ることで、年齢や発達によって造形的効果が異なると明らかになったことから、輪郭線を応用した造形遊びの教育実践方法を検討し、妥当性の検証と臨床応用に展開するための実践研究を進めた。

その結果、輪郭線の発達段階に沿った適切な使用方法によって、就学前の子どもの絵画表現を活性化させることが実証された⁶。

次に就学前美術教育の観点から、小学校図画工作科にスムーズにつながるよう、絵本を使っていた導入部分を幼小の連携が可能な素材に発展させることが出来ないか検討を行う。平成23年から全面的に実施されている最新の小学校学習指導要領では「表現」と「鑑賞」、「共通事項」が低学年にも新設されている。そこで就学前美術教育に表現活動を鑑賞教育が自然に融合される活動の考案が教育現場に急務であると考え、絵本に加え芸術作品の導入と輪郭線を取り入れた造形活動の正当性を導き出し、検証を行った。具体的には、絵本だけでなく V. Gogh の油彩画《ファンゴッホの寝室 La Chambre de Van Gogh à Arles》⁷ を子どもと一緒に観てこの絵について話し合い、その後芸術作品に関連した輪郭線の入った輪郭画用紙と白色画用紙を選択して絵画活動を始めるというものである⁸。結果、芸術作品を導入に活動を進めても、輪郭線を用いた造形遊びは子どものイメージを活性化し表現を柔軟に発展させることが出来ると分かった。したがって、芸術作品を描画発達の支援に応用することによって、言語活動の充実を図った就学後の美術教育に小学校での図画工作科の流れを鑑みた経験をすることは、教育的な意義を持つと考えられる⁹。よってこの時期に、好機を逸することない教育実践への波及・浸透が期待されることを示唆した。

以上のような研究経過と研究成果を背景にして、本論では継続研究として3つの芸術作品のみを導入とし輪郭画用紙を用いた調査を実施し、結果を整理・考察する。

2011年5月10日～7月14日の間に行った研究の基盤調査で、次のような予備的な結果を得ており、これらを基に実践を進めていく。5歳児80名に対して行った子どもの絵画80枚に表れる表現内容の調査により、子どもの絵に見られる内容は、生活

環境の中で、最も親しみのある身近なモチーフとも言える「植物」「人物」「動物」に関する内容という3つのカテゴリーに分類されることが明らかになっている¹⁰。その知見をもとに「植物」「人物」「動物」の3つの輪郭線を芸術作品とタイアップして変化する子どもの絵画表現を精査して、無理なく新しい学習指導要領への接続が配慮された就学前美術教育の方法を探る。

芸術作品との接点

子どもの絵画表現に最も表れる描画素材である「植物」「人物」「動物」の3つのカテゴリーを、選択する芸術作品の選出にも考慮することで、より自然な造形活動になるよう図る。作品の選抜と検討は、小学校学習指導要領に「自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、暮らしの中の作品などを鑑賞して、よさや美しさを感じ取る」¹¹と記されていることから、教育・保育現場に既にある作品や、地元作家の作品、近くの美術館に所蔵されている作品など身近な芸術作品を利用することも可能であり選択幅は多いと言えるが、本研究では、誰でも簡単に画集などから手元に準備をすることが可能な、一般的に有名な作品の中から造形プログラムに相応しい作品の一例として、3点の芸術作品を選び調査を実施している。

また作品はカラーコピーして、重量的に持ち運びが可能でかつ各クラスで30名ほどの子どもが集まって観るのに小さすぎない油彩用F10号の額縁に納め、子ども達が「芸術の作品鑑賞をしている」と思える実物感を出すように試みている。

「植物」カテゴリーの芸術作品

図1に示すように、R.マグリットの《不思議の国のアリス》を選択した。本作品は、植物の中でも樹木という大型植物が主

役に描かれている絵画で、下方には草が生えて、空中に洋梨が浮かんでいる。植物に関する子どもの絵画表現の内容を順番に上げると、花、果物、木、草であるので、一枚の絵の中にそれらができるだけ入っているものであることより、子ども達の植物に対する興味をひくものであるとして本作品を選んでいる。

さらに、樹木に目鼻があったり、空に果物が浮かんでいたり果物に顔や手があるという、実際の世界ではあり得ない情景が広がっている点は、鑑賞時に指摘しながら子どもたちが発言しやすく、色々な感想や意見が言い合えるという長所を見出したことも選択理由である。



図1 植物に関連した作品

「人物」カテゴリーの芸術作品

図2のようなP.ピカソの《泣く女》を額縁に入れたものを利用する。



図2 人物に関連した作品

《泣く女》を絵画の中から人物に関連する芸術作品として選択した理由は、一人の女性を描いているだけの絵だが、顔面内にも原色が用いられ、色鮮やかで、固有色が

用いられていないこと、多視点的な構図であること、注意深く観察して女性の表情から何が起こったのか推し量ったり話し合ったりしやすいと考えたことからである。

「動物」 カテゴリーの芸術作品

F. ボンボンの《白クマ》を選択している。絵画だけでなく、芸術作品を多様的に利用するために、立体作品として彫刻を1点入れた。彫刻のレプリカを子どもと鑑賞することも可能だが、今回は6つの調査のうち額縁自体を導入として用いる調査(5)に繋げるため、図3のように「植物」「人物」の作品と同じ額に入れることの出来る彫刻の写真を採用している。



図3 動物に関連した作品

モチーフになっている「熊」は、一般的に子どもの生活に身近な動物ではないにもかかわらず、頻繁に幼児の視覚環境に使用される身近なテーマ動物である。本作品は、デフォルメされることなく、シンプルな造形でありながら、生き生きとした熊らしさを表していると同時に、不相应な屋内を自然に徘徊している様子に、不思議さを感じることも、子どもの気づきに刺激を与える要素であると考えられる。

3つの作品はどれも、子ども達が知っている科学的・一般的知識に基づいて制作された作品ではなく、これまでに獲得した概念から逸脱する経験を与えるものを選出している。なぜなら、「自分が持っていた「何か」の概念(スキーマ)に新しい要素を加

える」¹²ことで「世界に広さや深さがもたらされる」¹³からである。子ども達の多くは、「以前作り上げた図式に頼りやすい」¹⁴と言われていることから、他の人間の目を通して表現され完成されている作品を視覚的にとらえて考える機会を持つことで、概念や記号的な表現に対する柔軟性を培うことを目的としている。

また子ども同士や教師とともに言葉のやりとりを試みることで、言語的刺激を受けることが出来る。このことは、「エ 言語活動の充実「B鑑賞」の各学年の内容に「話したり、聞いたりする」、「話し合ったりする」などの学習活動を位置付け、言語活動を充実する。」¹⁵と指導要領解説に記され新しく掲げられた改訂の要旨にも対応するものであると言える。したがって、言語活動を充実させた小学校入学以降の美術教育にスムーズにつながると考える。

研究の方法

図4のような流れで発展する造形活動を実施し、結果の比較と考察を行う。

まず(1)の調査で子ども達は、白色画用紙のみを用いて自由に絵を描く。次に(2)の調査では、植物に関連した芸術作品を鑑賞し絵画について話し合う。輪郭線のある画用紙(以下、輪郭画用紙)か白色画用紙を選択して絵を描く。(3)の調査では、人物に関連した芸術作品を鑑賞し話し合い輪郭画用紙と白色画用紙を選択して絵を描く。同じように(4)の調査で、動物に関連した芸術作品を鑑賞し話し合う。その後、画用紙の選択をして絵を描く。さらに(5)の調査としてこれまで芸術作品の鑑賞時に慣れ親しんだ額縁のみを提示し、この中にどんな絵が入っているといいかを意見を言ったり聞いたりする。その後輪郭画用紙と白色画用紙を選択して、絵を描く。最後に調査(1)と同じ白色画用紙に自由な絵を描き、調査(6)とする。

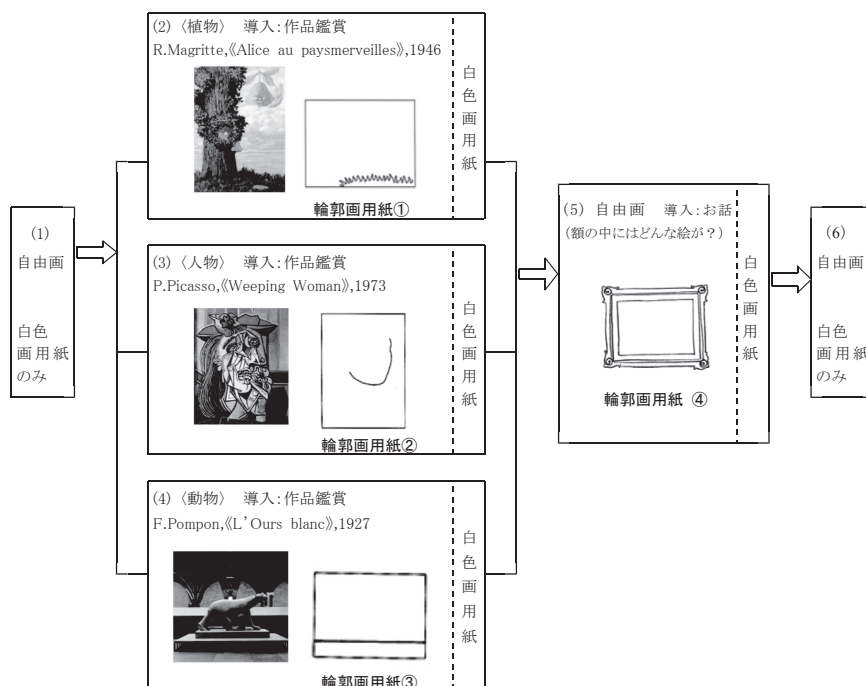


図4 6つの調査とその流れ

対象

岡山県内私立S幼稚園 年長児学級（Aクラス31名,Bクラス29名,Cクラス31名）
総計91名。6つの調査を各クラスで実施することで、約540枚の作品を収集する。

造形遊びと観察

(1)～(6)の調査をクラスごとに実施する。(2)～(5)では、鑑賞した美術作品に関連した人物・植物・動物・フレームの輪郭画用紙①②③④と白色画用紙を子ども自身が選択出来るようにし、画用紙とパスを持って座席に着いたら始めてもよいこと、画用紙は縦に用いても横に用いてもよいことを知らせる。画用紙にはあらかじめ名前を書いておく。調査中の対象者の態度、調査への興味など、気づいたことは個人別にまとめておく。対象者の描画への興味を確かめながら、楽しい描画活動であることを徹底する。効果的に研究を進めるた

めに、あらかじめ各クラス担任から、造形活動にあまり積極的ではない子どもの人数とその対象児についての聞き取り調査を行っておく。

描画材料

16色パス 八つ切り画用紙 ①～④のような4種類の輪郭画用紙(図4)を各91枚ずつと白色画用紙を546枚ずつ用意した。輪郭画用紙の内容は、次のようなものである。輪郭画用紙①子どもの絵画表現としてよく表れる花茎や花を避け、大まかに草のような形を右下に入れる事で、どんな植物も書き加えられるように工夫している。輪郭画用紙②人物に特化した形の一部として、《泣く女》の女性の顔の輪郭のような、少し大きめで歪な半円形を用意した。輪郭画用紙③動物に関連した輪郭線も、同じく曖昧で加筆することで形が成り立つ未完成な輪郭線として、屋外のどの場所にも変えられる基底線を描いてい

る。輪郭画用紙④調査(6)での白色画用紙のみの活動に移る前に、これまで鑑賞してきた芸術作品の入っていた額縁に似せたフレームを用意し、その中にどんな絵を入れたらよいか考えて自由に描画や彩色が出来る輪郭線を作成した。

結果の整理方法

画用紙の種類及び年齢による子どもの絵画表現を比較検討するために色数・着色面積・表現内容の分析・どちらの画用紙を選択したか、という視点と分類項目を設定した。

調査日時

2015年5月15日～7月7日、9:30～10:15

調査日の内訳と天候は表1にまとめている。晴れの日には園庭で遊び疲れたり保育室に不在であったりということをできるだけ避けるため、子どもの生活想定をして、担任教師の協力を得ることで、比較的登園後まもない時間に活動設定している。

表1 調査実施日

| | 調査(1) | 調査(2) | 調査(3) | 調査(4) | 調査(5) | 調査(6) |
|----|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| A組 | 5/15 晴 | 5/26 晴 | 6/5 晴 | 6/12 曇 | 6/19 雨 | 6/30 曇 |
| B組 | 5/21 晴 | 5/29 曇 | 6/9 曇 | 6/16 晴 | 6/23 晴 | 7/2 晴 |
| C組 | 5/28 雨 | 6/2 雨 | 6/11 曇 | 6/18 曇 | 6/25 晴 | 7/7 雨 |

結果と考察

色数

子どもの各作品において、何色の色が使用されているか数える。使用するパスは全16色のものを使っているため、全色使用で16色となる。表2は、調査とクラスごとに表れた色数の平均をまとめたものである。

表2 色数の平均

(色)

| 調査 | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 平均値 | 7.9 | 8.3 | 6.1 | 6.5 | 7.9 | 8.0 |

最初に、テーマを設定せず子どもが自由に好きなものを描く調査(1)と、5つの調査において子ども達が自主的な画用紙選択によって輪郭画用紙を用いた絵画活動を経験した後で、再度行った自由画の調査(6)における色数の平均値を比較すると、全体の色数は若干ながら上昇している。このことから、輪郭画用紙の選択肢を利用して絵画表現の経験を重ねることで、クラス活動に参加している子ども全員に対して緩やかに色数を増やす効果があったことがわかる。ところが調査(3)(4)では平均的に減少している。この傾向は、次の着色面積でも同じく表れている。

着色面積

子どもが、画用紙一枚分の面積に対して描画と彩色によって占有した割合を、着色面積として計算する。画用紙の面積は、縦27cm×横38cm=1026cm²で、全面着色で1026cm²となる。表3は、各調査に表れた着色面積の平均をまとめたものである。結果は色数の平均値の増減変化と比例して、調査(6)では最終的に調査(1)よりも増加しているだけでなく全調査内で最も着色面積が多くなっている。これは、子どもの自然な発達によるものであることも考慮されるが、調査期間は約2か月という短期間であることと、クラス全体での自然な描画発達を促進する実践研究であることから効果的な傾向があると考えられる。よって輪郭画用紙の選択を取り入れた積極的な活動の積み重ねは、描画意欲と絵画表現を活性化させる有効性があると省察する。調査(3)(4)

で着色面積が一時的に減少している点については次に述べる。

表3 着色面積の平均

| 調査 | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 平均値 | 311.4 | 304.4 | 263.9 | 265.0 | 341.1 | 338.7 |

どちらの画用紙を選択したか

6つの調査の内、輪郭画用紙を選ぶことの出来る調査(2)～(5)で、子ども達が主体的に輪郭画用紙をどれくらい利用したかを整理し、表4にまとめた。

表4 輪郭画用紙の選択率

| 調査 | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) |
|-------|-----|------|------|------|------|-----|
| 人数(人) | | 53 | 14 | 25 | 53 | |
| 割合(%) | | 60.9 | 17.5 | 30.1 | 63.1 | |

調査(2)では全体の約6割の子どもが植物に関連した輪郭画用紙を用いて絵画表現を行っている。ところが、人物・動物に関連したテーマで進めた調査(3)と(4)では、17.5%、30.1%と調査(2)もしくは(5)の半分以下の選択率という結果になった。続いて行われた調査(5)では再び63.1%と輪郭画用紙選択率は復帰している。色数および着色面積の平均値の変化とともに比較すると、選択率の増減は、色数・着色面積の増減と対応していることがわかる。調査(3)と(4)において、輪郭画用紙を子ども達が積極的に選択しなかった原因の一つは、調査(2)や(5)と比べて輪郭線自体が多くの子供達にとって、選択するほど魅力的ではなかったことによると言える。したがって、描画意欲を活性化させる働きを持つ輪郭線の設定について大きく改善の余地がある。だが、輪郭画用紙の選択率と色数・着

色面積が同位性をもっていることから、輪郭画用紙が子どもの絵画表象に影響していると推測出来る。視覚的に魅力のある輪郭画用紙を提示し調査(2)と(5)と同様に輪郭線を利用した絵画活動の経験を積むことができれば、より明確な子どもの描画意欲を引き出す結果が表れると考えられる。

表現内容の分析

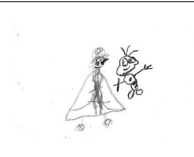

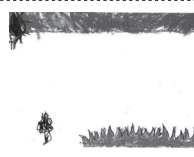
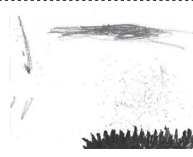


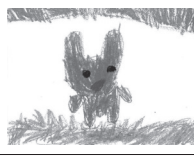


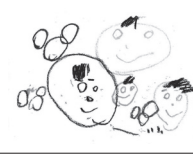

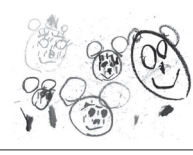
絵画活動に消極的な子どもとそうでない子どもが共に活動している本調査で、消極的な子どもの表現がどのような変化をしているか縦断的に比較する。BCの2クラスには、最初の調査である(1)において各1名ずつ、作品に表れた色数が3色以下、着色面積が85cm²以下の幼児(Bクラス 女児R・5歳7～8か月、Cクラス 男児T・5歳8～9か月)がいた。2名の作品の経過についてまとめたものが表5である。

女児Rは、(2)～(5)のうち(2)(3)(5)で輪郭画用紙を利用した。最初は画面の8%を水色・黒色・赤色を用いて両腕のないエルサと不安定に浮いているが特徴を押さえたオラフを描いている。調査(2)では輪郭線を塗り、空と1本の花を描くが、まだ余白が多く植物として描かれた花も遠慮がちに下方に小さくある。ところが調査(3)では、顔の輪郭線を上手に用い、首、胴体、両腕両足のある女の子を画面に大きく描いている。オレンジのハイヒールを履いて左足には膝関節もある。《泣く女》を鑑賞した時、まずこれは男性が描かれているのか女性が描かれているのかで意見が分かれた。「煙草を吸っているように見えるから女」、「男の人が女の人の格好をしている」などの発言の中で、結論として「まつげが長いから女である」ということで子ども達に納得された。この作品にはアーモンド形の両目に2本ずつ太いまつげが描かれていることから、直前までの会話が影響

しているとも考えられる。調査（４）では輪郭画用紙を選択せず、調査（２）と同じような背景に大きく真ん中にピンク色のうさぎを入れ459cm着色することが出来ている。調査（５）では13色を用いて、額縁の中に女の子と虹色の尾がついている星を描いている。最後に調査（６）では、色数10色で、うさぎと熊、花、果樹、ブドウ、星、雲と空を描く。テーマの指定をしていない調査（５）（６）と調査（１）と比較した場合、数値だけでなく描画内容も調査（２）（３）（４）の集大成のように多様なモチーフを画用紙一面に配置し、大胆さやダイナミックさを経験したことで、描画に対する積極性を感じる作品になっていると言える。

続いて男児Ｔは、調査（１）で小さく丸い５つの顔のみを描いている。紫色の顔には黒い頭髪が生えているがその他は単色で眉目鼻口があるのみである。調査（２）では輪郭線を緑で塗り空に水色を着色しているが、その他に植物は表れていない。調査（３）は、輪郭画用紙を横向きに置き、輪郭線をきっかけとして２つ耳のある生き物を描いている。輪郭線が大きめに置かれているので、過去の顔よりは大きな顔の配された構図となった。以降の調査では輪郭画用紙を選択してはならず、調査（４）では空を左右に塗り、その下には３つの円でミッキーマウスのような形態と黒い円だけで終わっている。調査（５）では調査（３）で描いた大きさの顔が３つ、調査（４）で表れたミッキーマウスが３つ、紙面いっぱい描いている。最後の調査（６）でも再び円を組み合わせた顔がいくつも描かれているが、画用紙の全面を利用して、大きく色鮮やかに完成させている。男児Ｔによると、ミッキーマウスとミニーマウスが好きだから描いたと説明している。

表５ 各調査における２幼児の絵画作品

| | Bクラス 女児 R (5歳7～8か月) | Cクラス 男児 T (5歳8～9か月) |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 調査(1) |  |  |
| | 色数3 着色面積 83 | 色数3 着色面積 81 |
| 調査(2) |  |  |
| | 色数5 着色面積 237 | 色数3 着色面積 125 |
| 調査(3) |  |  |
| | 色数6 着色面積 293 | 色数5 着色面積 137 |
| 調査(4) |  |  |
| | 色数5 着色面積 459 | 色数2 着色面積 98.5 |
| 調査(5) |  |  |
| | 色数13 着色面積 410 | 色数4 着色面積 198.5 |
| 調査(6) |  |  |
| | 色数10 着色面積 434 | 色数13 着色面積 212 |

※網掛けは輪郭画用紙選択

男児Ｔの作品を見ていくと、最終的にはカタログのような空間構成に終わっているが、以前と比較すると白色画用紙を前に

遠慮なく色と形を相互に利用して作品を作り出すことが出来るようになっていように見える。着色面積が大きいことが子どもの豊かな絵画であるとい概に言うことはできない。しかし子どもが白色画用紙を前に挑んだ表象活動として、豊かな絵画表現への一歩である主体性や積極性を見出すことは可能であると考え。

クラスで一斉に行う活動の中で、絵画表現に逡巡している子どもに対する手だてを考慮しながら他の子どもの描画発達に相應しい実践を行うことは容易ではないと言える。本研究では芸術作品と輪郭画用紙の選択肢を取り入れることで、無理なく子どもの絵画表象の活性化させる支援の可能性を示した。マグリットの絵画を鑑賞した後、男児 K (5 歳 9 か月) は、輪郭画用紙を用いて木に横顔がある絵画を描いた (図 5)。



図 5 男児 K (5 歳 9 か月) が描いた調査 (2) の作品

実際の作品では洋梨が空に浮かんでいるが、男児はトマトを木から生えているようにぶら下げ、トマトの他にもいくつかの果実がなっており幹には昆虫がとり、下部の草の向こうには水面とさらに太陽を描き加えている。作品の鑑賞後は、その作品は片付け、絵を見ながら子ども達が描くことはできなくなっていたので男児が記憶をたどりながら創作されたものであると言える。「ひとたびある効果を得るためにある図式を位置づけることができれば、より特殊な図形的効果を得る手段として、彼らは

小さい修正を簡単に、そして繰り返し導入出来るようになる」¹⁶と H.Gardner (1980) が説明している。図式を増やし柔軟に利用出来ることで、子ども達は自由で豊かな絵画表現に到達していくと考えられる。

齋藤亜矢 (2014) は、「記号的な表象を描くには、自分の描く線にモノの形を見出す記号的な見方が必要だ。一方で、モノを写實的に描くときには、その記号的な見方を一時的に制御しておいて、見たモノをありのままの形や線の二次的布置としてとらえる必要がある」¹⁷と分析している。年長クラスの子供達は、知っているものを自由に絵画的表象にすることにしばらく慣れ親しむ生活を送ってきた。ところがその記号的な表現から写實的に描きたいという衝動による表現へ変化し始める段階に入っている。特に記号的な見方を一時的に制御して写実表現を行う時期にある子どもにとって、もう一度多様な表現に触れ言語的・視覚的刺激を受け、じっくり観察をしながら、得た知識を咀嚼する時間を持つことが必要なのではないだろうか。

課題

本論では、絵画表現に躊躇のある子どもとそうでない子どもが共に無理なく行うことの出来る活動の実践に焦点を当てて論述した。加えて輪郭画用紙を応用し芸術作品に触れる機会を用意することで、新しい学習指導要領への接続も考慮された幼年期の美術教育の方法を探求している。今後、本研究で得た知見をもとに、多様な表現内容テーマに対応し子どもの興味をひきながら描画意欲を促進する輪郭画用紙を検討し、すこやかな描画発達を支える就学前造形教育の発展に寄与したい。

謝辞

研究の推進にあたりまして、毎回、子ども

達の描画調査に快くお力添えとご協力くださいます, S幼稚園の園長先生をはじめとした教職員の皆様, 描画活動に参加した園児の皆様に心から感謝申し上げます。

註

- 1) René François Ghislain Magritte, Non Date, "Alice au paysmerveilles", gouache, 35×26cm, Collection privée, Belgique.
- 2) Pablo Picasso, 26 October, 1937, "Weeping Woman", oil on canvas, 60×49cm, Tate Modern, London.
- 3) François Pompon, Vers 1927, "L' Ours blanc" pierre de Lens, 1,63×90×2,51m, Musée d'Orsay, Paris.
- 4) 小田久美子・高橋敏之, 2005, 「絵本の読み聞かせと輪郭画用紙の活用が幼児の絵画表現へ与える効果」, 日本乳幼児教育学会誌『乳幼児教育学研究』14号, pp. 9-19.
- 5) 小田久美子・高橋敏之, 2006, 「絵本の読み聞かせ後の輪郭画用紙と白色画用紙における子どもの絵画表現の比較」, 日本美術教育学会誌『美術教育』289号, pp.28-35.
- 6) 小田久美子・高橋敏之, 2014, 「3つの輪郭線が及ぼす絵画表現への影響と比較」, 日本美術教育学会誌『美術教育』298号, pp.8-14.
- 7) Vincent Van Gogh, 1889, "La Chambre de Van Gogh à Arles -Van Gogh's Bedroom", huile sur toile, 57.3×73.5cm, Musée d'Orsay, Paris.
- 8) 小田久美子, 2015, 「芸術作品の導入を緒に考察する絵画的表象の位相—小学校図画工作科との接続をめざす教育臨床研究—」, 大学美術教育学会誌『美術教育学研究』第47号, p.104.
- 9) 小田久美子, 前掲書8, p.109.
- 10) 小田久美子・高橋敏之, 2012, 「Comprehensive Art Educationを意識した幼年造形カリキュラムに関する研究」, 『発達研究』vol.26, pp.39-50.
- 11) 文部科学省, 2008, 『小学校学習指導要領』, 第2章各教科 第7節 図画工作科.
- 12) 齋藤重矢, 2014, 『ヒトはなぜ絵を描くのか 芸術認知科学への招待』, 岩波科学ライブラリー 221, p.93, 岩波書店.
- 13) 齋藤, 前掲書12, p.93.
- 14) H.Gardner: Artful Scribbles; The Signification of Children's Drawings, New York, Basic Inc. 1980, p.173. (星美和子/訳, 1996, 『子どもの描画—なぐり描きから芸術まで—』, p.215, 誠信書房.)
- 15) 文部科学省, 2008, 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』, p.8.
- 16) Gardner, 前掲書14, p.170, 前掲訳書14, p.211.
- 17) 齋藤, 前掲書12, p.57.